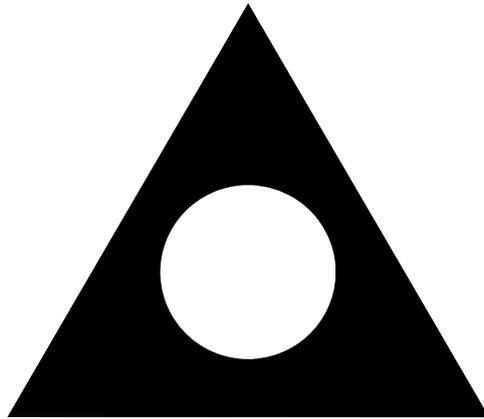


熊本県松橋収蔵庫 企画展示資料集

肥後辛島家のひとびと





こぼれ話① ～辛島家の家紋～

辛島家の家紋は、もともと「鱗形に一文字」でしたが、天和3年（1683）9月に「鱗形に玉一つ」に改められています。

これに先立つ天和元年（1681）に第4代・道珠^{どうしゆ}が熊本藩に学問師役として登用されており、この出来事と関係あるのかもしれない。

この「鱗形に玉一つ」は、現在も辛島家の家紋として使用されています。

いぶらわし

肥後辛島家は、江戸時代から明治・大正時代にかけて、熊本藩校・時習館の教員や熊本市長を輩出し、現在も熊本市中央区の辛島町・辛島公園にその名を残しています。

肥後辛島家に伝来した資料群は、熊本県立第一高等学校で長く教鞭をとった辛島信子氏の逝去後、御遺族により熊本県に寄贈され、これまで熊本県松橋収蔵庫において整理・調査研究を進めてきました。

このたび、これまでの調査研究成果の一環として、肥後辛島家の歴代当主の著作物、近代熊本市政関係資料、辛島家と交流があった人物ゆかりの資料を展示し、歴代当主とその業績を紹介する企画展示「肥後辛島家のひとびと」を開催しました。

本展示を通して、多数の県民の皆様にも、熊本の歴史に確かな足跡を残した肥後辛島家について理解を深めていただくことができました。また、御子孫の皆様にも県内外から多数御来館いただき、これまでの資料寄贈等の御芳志に多少なりともお応えできたのではないかと思います。

このたび、展示資料の解説に加え、辛島家研究の基礎資料となる「辛島氏家系」等を資料編として収録し、展示資料集として刊行することとしました。

最後になりましたが、展示開催及び本書編集にあたり、御協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

平成二十五年六月

熊本県企画振興部地域・文化振興局

文化企画課長 吉永明彦

目次

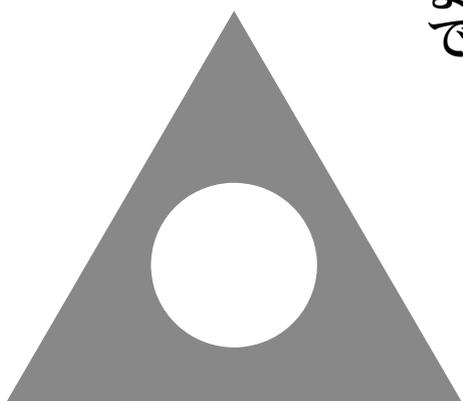
ごあいさつ	3
展示資料解説	
辛島家のひとびと（近世）	5
辛島家の交流	18
辛島家のひとびと（近現代）	29
資料編	
辛島家系	49
辛島格略歴	65
辛島知己履歴書	67
肥後辛島家歴代当主一覧	70
肥後辛島家略系図	71
展示資料一覧	72
主な参考文献	77

凡例

- ・本書は、熊本県松橋収蔵庫において平成二十五年一月七日から三月九日まで開催した「肥後辛島家のひとびと」の資料集として作成した。
- ・本書の資料番号と展示の順序は、必ずしも一致しない。
- ・辛島家歴代当主名の表記は、原則として通称を用いた。
- ・展示資料解説は、近世資料を田中孝行（熊本県文化企画課）、近現代資料を松本晃世（同）が担当した。
- ・資料編は、田中が担当した。
- ・編集は、田中と松本が担当した。
- ・web版（pdfファイル）は、刊行物とは一部内容が異なり、写真の解像度を下げている。

辛島家のひとびと
近世

初代・与三左衛門から第十代・多喜次まで



初代 与三左衛門 第二代 惣兵衛 第三代 仁左衛門

辛島氏の祖

辛島氏は、家系図や先祖附などによると、朝鮮半島からの渡来系氏族で、本姓は漆島、豊前国宇佐郡辛島郷に居住したことにより、辛島（辛嶋・韓島とも）を名乗つたとされます。

この豊前辛島氏は、宇佐八幡宮の神職を代々務めたといい、養老四年（七二〇）には、一族の辛島勝代豆米が元正天皇の命を受け、大隅・日向の反乱を鎮圧したことが「扶桑略記」などに記録されています。

肥後辛島家のはじまり

戦国時代には、豊前辛島氏の庶流とされる浄阿弥が、河内国若江郡の名主を務め、子の与三左衛門が跡を継いでいます。

この与三左衛門が天正から慶長年間に、肥後国に浪人として移住し、僧となっていた三男・惣兵衛（第二代）も父に続いて移り住んだことが家系図に記されています。

第三代・仁左衛門は喜庵と号し、白谷道哲に学び、熊本城下で町医者として活動していたようです。

肥後辛島家の家系図では、浄阿弥を祖としていますが、肥後に住み始めた与三左衛門を初代に数えています。

浄阿弥、与三左衛門から仁左衛門までは関係史料が乏しく、与三左衛門が肥後国に移住した時期を含め、その実態については不明な点が多く残っています。

△肥後辛島家の系譜

1 辛島氏家系



明治時代

「辛島氏家系」と題された、肥後辛島家の家系図。

肥後辛島家の祖である浄阿弥から第十二代・格までの別名や経歴などが漢文で記録されている。

別に第八代・才蔵までを記載した家系図があり、本資料はその内容を踏襲し、第九代・大七以降は、先祖附や墓碑銘などを参考にして作成されたと思われる。

辛島家歴代当主の業績や血縁関係を知るうえで欠かさない基礎資料といえる。

詳細については資料編を参照していただきたい。

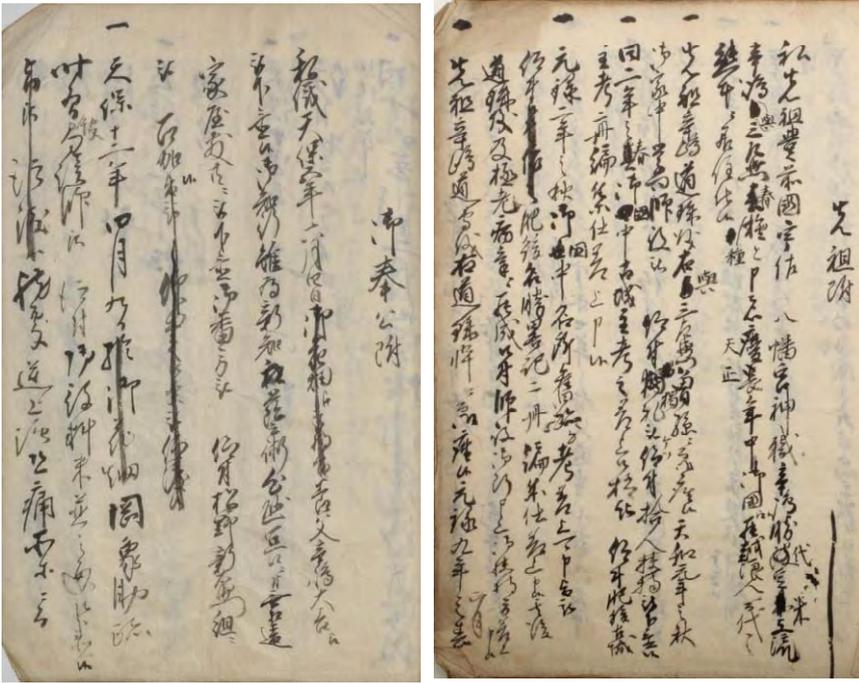
▲ 歴代当主の勤務実績

2 先祖附并御奉公附

江戸時代後期

第四代・道珠から第九代・大七まで、辛島家歴代当主の勤務実績や昇進・褒賞などを記録した「先祖附」と、第十代・多喜次の「御奉公附」から構成されている。

内容や文言について、加筆・訂正のあとが多くみられるため、藩庁に提出する前の原稿段階の資料と推定される。



▲ 先祖の霊を祀る

3 辛嶋家累代霊位

明治時代

初代・与三左衛門から第十二代・格夫妻までの辛島家歴代当主とその夫人の霊位と没年月日が記録されている。代々の霊位の末尾に「神主」とあることから、儒教の葬礼様式にならない、先祖を祀るために製作されたものと推定される。第十代・多喜次までは同筆であるが、彝蔵の表記がなく、格を第十一世とし、また格夫妻は法名で追記されている。

辛嶋家累代霊位	
初代 与三左衛門 神主 寛文三年 八月十四日 歿	初代 与三左衛門 夫人 神主 寛文三年 八月十四日 歿
二代 与三左衛門 神主 寛文九年 十月十五日 歿	二代 与三左衛門 夫人 神主 寛文九年 十月十五日 歿
三代 与三左衛門 神主 寛文十六年 八月十五日 歿	三代 与三左衛門 夫人 神主 寛文十六年 八月十五日 歿
四代 与三左衛門 神主 寛文二十三年 八月十五日 歿	四代 与三左衛門 夫人 神主 寛文二十三年 八月十五日 歿
五代 与三左衛門 神主 寛文三十年 八月十五日 歿	五代 与三左衛門 夫人 神主 寛文三十年 八月十五日 歿
六代 与三左衛門 神主 寛文三十七年 八月十五日 歿	六代 与三左衛門 夫人 神主 寛文三十七年 八月十五日 歿
七代 与三左衛門 神主 寛文四十四年 八月十五日 歿	七代 与三左衛門 夫人 神主 寛文四十四年 八月十五日 歿
八代 与三左衛門 神主 寛文五十一年 八月十五日 歿	八代 与三左衛門 夫人 神主 寛文五十一年 八月十五日 歿
九代 与三左衛門 神主 寛文五十八年 八月十五日 歿	九代 与三左衛門 夫人 神主 寛文五十八年 八月十五日 歿
十代 与三左衛門 神主 寛文六十五年 八月十五日 歿	十代 与三左衛門 夫人 神主 寛文六十五年 八月十五日 歿
十一代 与三左衛門 神主 寛文七十二年 八月十五日 歿	十一代 与三左衛門 夫人 神主 寛文七十二年 八月十五日 歿
十二代 与三左衛門 神主 寛文七十九年 八月十五日 歿	十二代 与三左衛門 夫人 神主 寛文七十九年 八月十五日 歿

第 三 世	
喜庵府君神主 寛文三年 七月十二日 歿	喜庵府君夫人神主 寛文三年 七月十二日 歿
妙心孺人吉田氏神主 寛文九年 十月十五日 歿	妙心孺人吉田氏夫人神主 寛文九年 十月十五日 歿
第 十 一 世	
大我院殿格譽静山流水居士 大正二年五月二十二日 歿	大我院殿格譽静山流水居士夫人 大正二年五月二十二日 歿
静安院殿流譽貞操龜順大師 昭和十七年十月二十四日 歿	静安院殿流譽貞操龜順大師夫人 昭和十七年十月二十四日 歿

(部分 拡大)

第四代 道珠

略歴

寛文八年（一六六八） 宇土藩に仕官
天和元年（一六八一） 熊本藩に仕官、学問師役に任命
「肥州古城主考」を著す
元禄二年（一六八九） 「肥州名勝略記」を著す

道珠と朱子学

第四代・道珠は、少年期に朱子学者として知られた常光寺（妙永寺）の日収や日芳に学んでいます。この日収には、「国郡一統志」の著者・北島雪山も同時期に学んでいます。

日収の死後は、京都に赴き、江村全庵や山崎闇斎といった当代一流の朱子学者の門を叩いています。熊本に戻り、町医者として活動していた時期もありましたが、その学問が認められ、宇土藩（四年で致仕）、ついで微禄ではあったものの熊本藩の学問師役として登用されています。

これに先立つ寛文九年（一六六九）には、藩内で隆盛を誇った北島雪山ら陽明学派が追放されており、道珠の仕官との関係性が注目されます。

なお、「道珠」という名は、幕府や朝廷で診療を担当したこともある法印・武田道安に賜ったと家系図には記されていますが、道珠とどのような関係であったかよく分かっていません。

肥後国の主な近世地誌

寛文七年（一六六七） 北島雪山「国郡一統志」
天和元年（一六八一） 辛島道珠「肥州古城主考」
元禄二年（一六八九） 辛島道珠「肥州名勝略記」
宝永六年（一七〇九） 井澤幡龍「肥後地誌略」
享保十三年（一七二八） 成瀬久敬「新編肥後国誌草稿」
明和九年（一七七二） 森本一瑞「肥後国誌」

地誌の編集

江戸時代には、各地でさまざまな学問や芸術、文化が花開きます。そのひとつに、寺社・名所・旧跡などを「地誌」として編集したことを挙げることができます。

肥後国における地誌編集は、北島雪山の「国郡一統志」に始まり、辛島道珠の「肥州古城主考」「肥州名勝略記」と続きます。この三冊は、藩による国絵図（地図）作成時に資料として活用されています。

その後も、さまざまな地誌が編集されていますが、成瀬久敬「新編肥後国誌草稿」が肥後国の地誌の完成とされます。

この「草稿」を森本一瑞が増補・改訂した「肥後国誌」が広く普及したことにより、郷土の歴史が断絶することなく現代に伝わっているといえます。

▲肥後中世城の記録

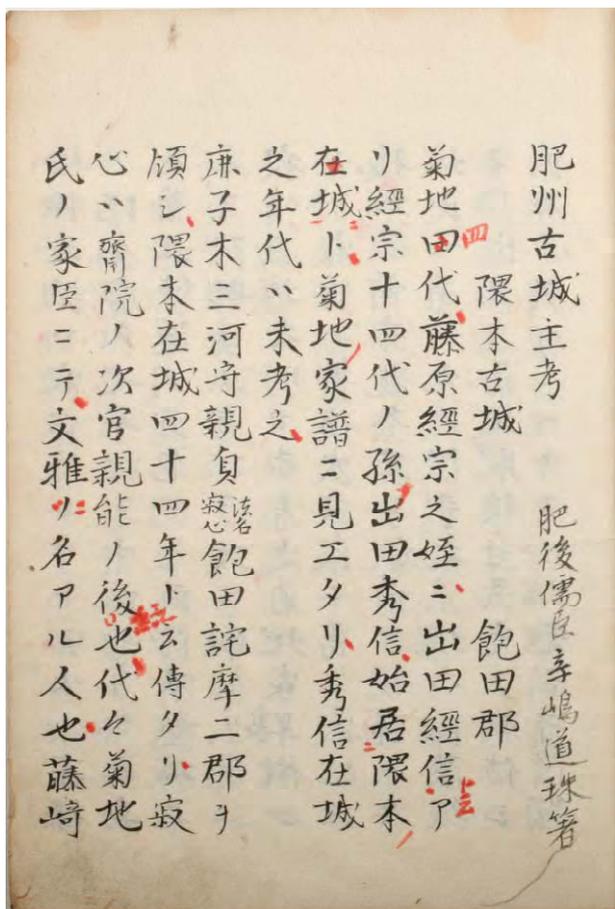
4 肥州古城主考

江戸時代

第四代・道珠の著作として「肥後古城主考」の書名で知られ、肥後国内の中世城の城主と来歴を伝える資料である。

本資料は上下二冊から成り、巻頭に「肥後国古城主考之上(下) 目録」(目次)、内題の下に「肥後儒臣辛嶋道珠著」と墨書があるが、奥書がなく作成年代等は不明である。

道珠の「肥州古城主考」は、天和元年(一六八一)の著作で、『新訂肥後文献解題』では、「古城址五十五ヶ処」の記載となっているが、本資料には五十九ヶ所の記述がある。



▲森下功氏の収集本

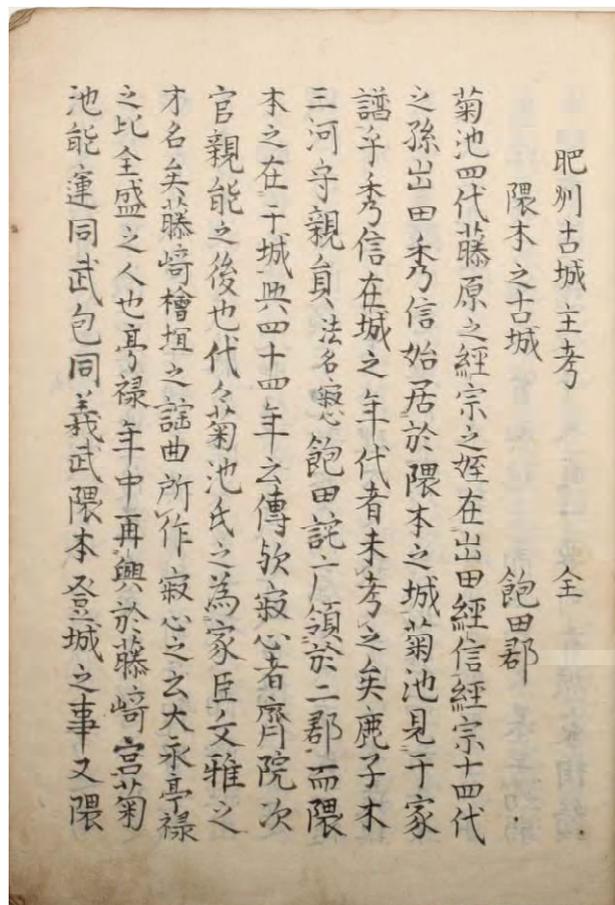
5 肥州古城主考

文政二年(一八一九)

「肥州古城主考」の写本のうち、熊本近世史の会や肥後金石研究会で活躍された森下功氏が収集されたものである。

奥書に「文政二卯年閏四月 東氏二請而書写之 木造正齋」とあり、楷書の漢文体で墨書されている。「肥州古城主考」は、のちに森本一瑞・横田氏敦により「古城考」(『肥後文献叢書』所収)として大幅に増補されている。

なお、「肥州古城主考」は、高野和人氏「近世肥後の学者たち」で史料紹介されているので、参考にしていただきたい。



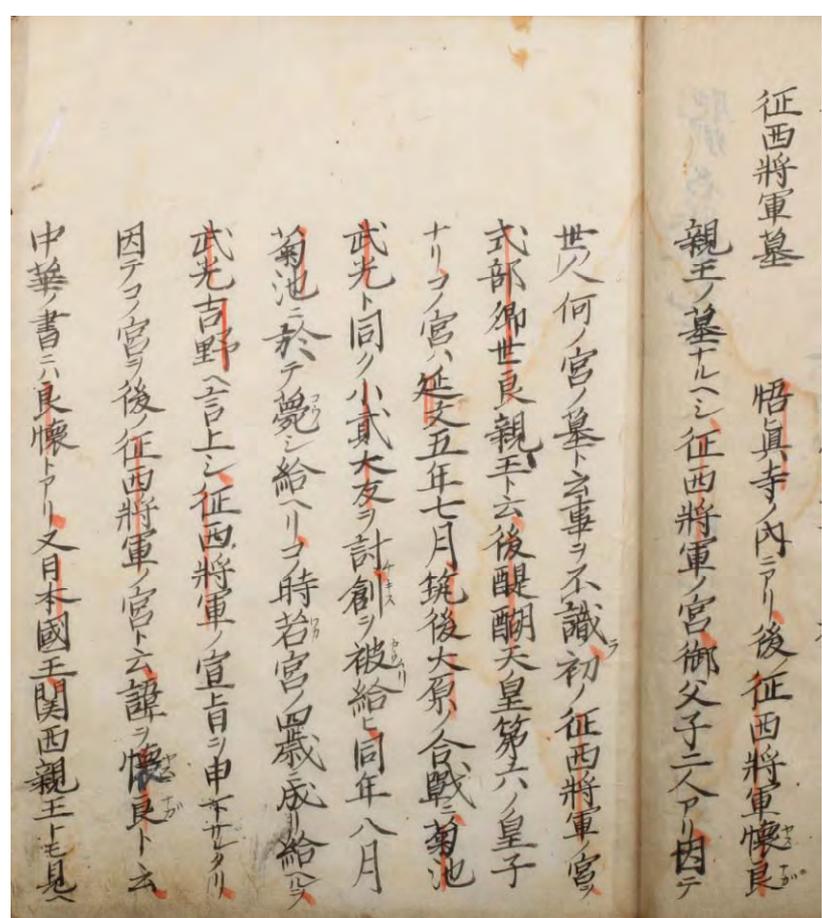
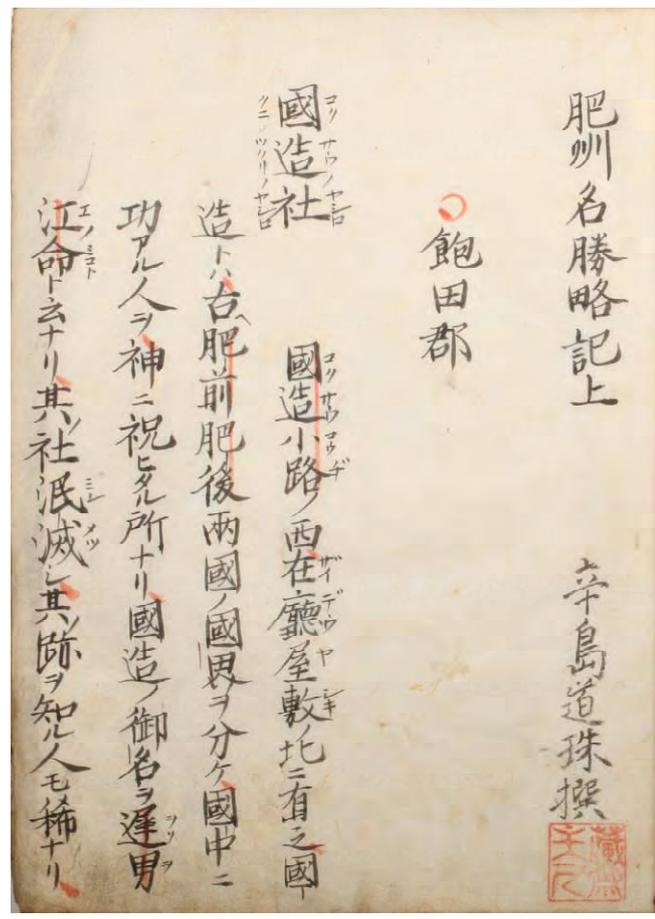
▲郷土の歴史を伝える

6 肥州名勝略記

元禄二年（一六八九）

第四代・道珠が熊本藩内の名所・旧跡などの調査をもとに著作した地誌で、上下二冊から成る。一般的には「肥後名勝略記」の書名で知られているが、本資料や永青文庫本は「肥州名勝略記」と題する。

本資料は、上巻に飽田郡ほか三郡、下巻には八代郡ほか七郡を収録し、上巻巻頭と下巻巻末に「蔵斎主人」の朱印、また下巻には「元禄二年己巳九月応命上」の奥書がある。



また、全文は楷書の片仮名文で墨書されており、特徴としてフリガナが多く振られていることが挙げられる。このなかに、「懷良」親王に「ヤスナガ」、「金峯山」に「キンブゼン（キンブザン）」とあることが興味深い。

なお、『肥後国地誌集』には、森下功氏による「肥後名勝略記」の翻刻文ならびに解題が収録されているので、参考にしていただきたい。

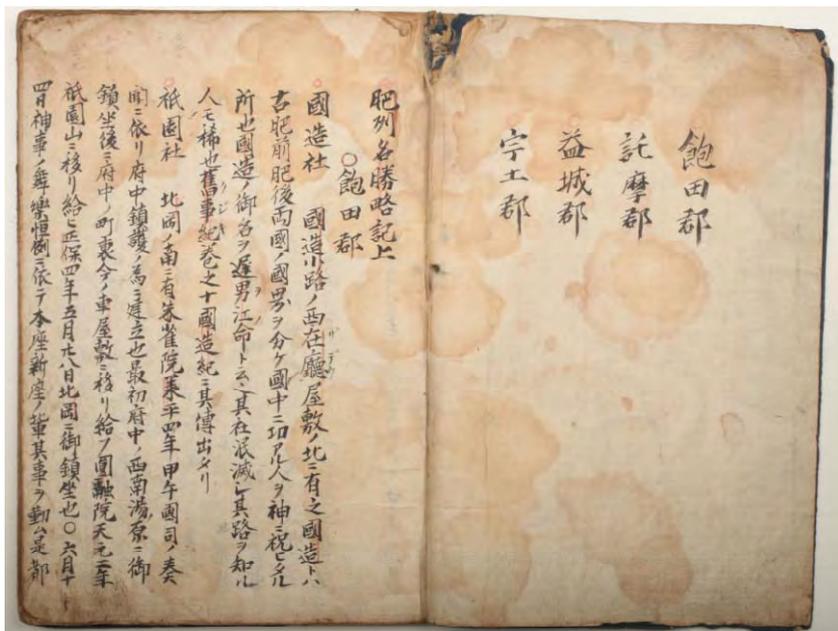
▲肥州名勝略記 牛島本

7 肥州名勝略記

宝暦十三年（一七六三）

「肥州名勝略記」は、数多くの書写本が作成されているが、本資料は森下功氏もりしたいさおの旧蔵本であり、森下氏による「肥州名勝略記」の校訂時に底本のひとつとして用いられている。

「宝暦十三癸未中春写焉」「飽田郡河内之住人 牛嶋氏公道六十九歳」の奥書があり、楷書の片仮名文で墨書されている。



▲肥州名勝略記 白垣本

8 肥後名勝略記

江戸時代後期

牛島本と同じく、森下功氏もりしたいさおの旧蔵本で、奥書を欠くが、巻頭に「葉山蔵書」の新印と「白垣印章」の古印があり、表紙には「白垣」の墨書がある。

本資料は、行書の平仮名文で書写され、牛島本に比べて内容に追記があり、書写年代は江戸時代後期と推定される。



第五代 道専 第六代 義先 第七代 義助

略歴

元禄九年（一六九六） 道専、学問師役に任命
 宝永七年（一七一〇） 義先、学問師役に任命
 宝暦三年（一七五三） 義助、学問師役に任命
 同四年（一七五四） 義助、時習館訓導に任命

辛島家の恩人 秋山玉山

熊本藩校・時習館の設立に尽力し、初代の教授に任命された秋山儀右衛門（玉山）と第六代・義先は、「莫逆の友」（無二の親友）と記録されるほどの間柄でした。

享保十八年（一七三三）八月二日、江戸滞在中の義先が急逝し、またその妻も同じ日に熊本で死去したといえます。

死の間際に、義先から後事を託された玉山は、帰藩後すぐに辛島家を訪れ、幼くして孤児となった義助を慰め、諸事を指示し、辛島家存続に手を尽くしました。

その甲斐もあって、義助は藩から扶持米を与えられ、その後は玉山の薫陶を受けて成長し、玉山の江戸赴任にも同行しています。

義助は、のち青溪と号し、時習館設立時に訓導に抜擢され、その子・才蔵（塩井）は最高位の教授まで昇進していますが、これもひとえに玉山の恩恵によるものといわれています。

△道専 最期のこだわり

9 辛島道専辞世からしまどうせんじせい

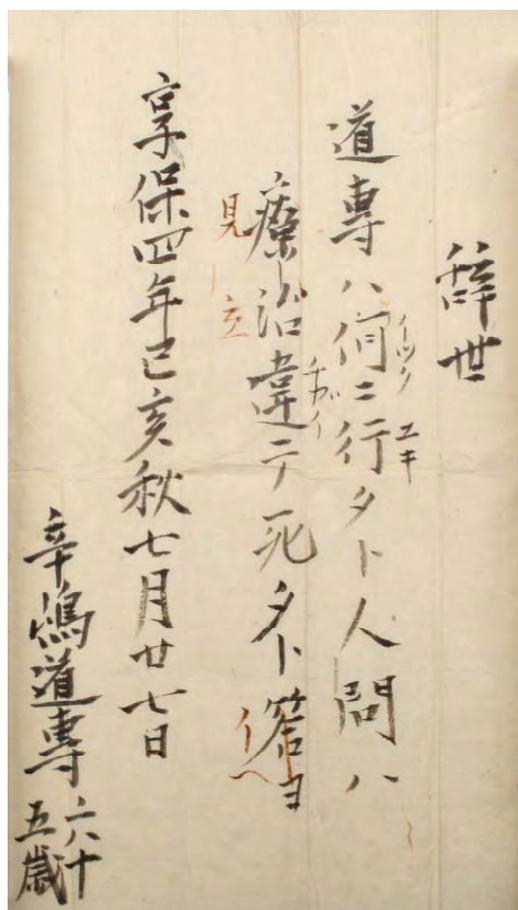
享保四年（一七一九）

第五代・道専は、父・道珠の跡を継ぎ、四十年にわたって学問師役を務めたが、晩年は大病を患い、職を辞している。

辞職後は、自宅で療養を続けていたが、迫る死を予感したのであろうか、辞世を残している。

辞世には修正がみられ、最期まで字句にこだわったのであるうか。

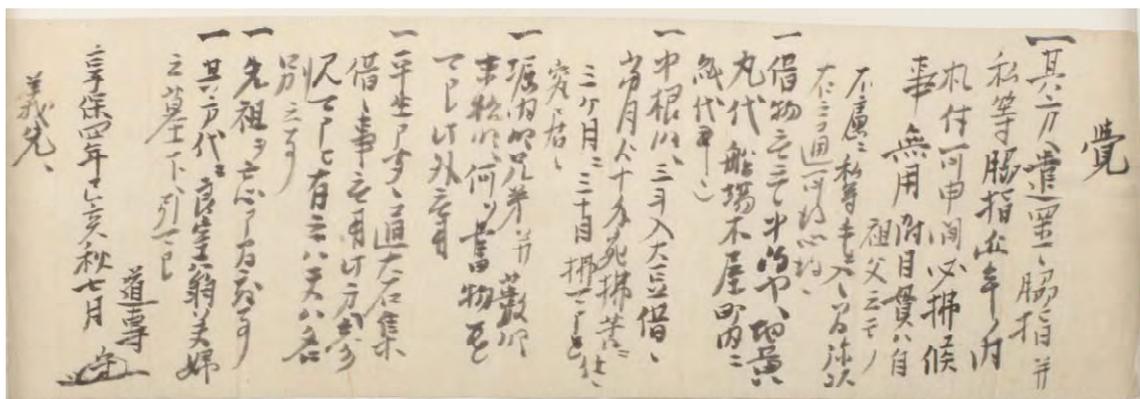
道専は、この辞世を詠んだ一月後にその生涯を閉じている。



▲道専の終活

10 辛島道専覚書

享保四年（一七一九）

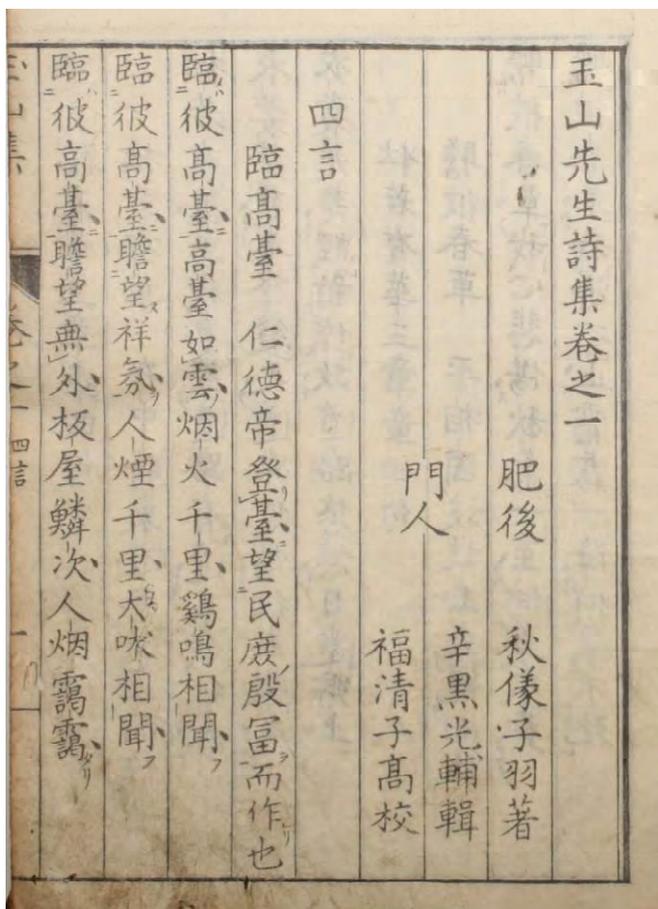


第五代・道専から子息・義先へ宛てた覚書で、辞世と同時期に作成されている。文面からは、金銭や物品の返済処理を依頼するとともに、先祖の供養や墓の管理について、遺言していることが分かる。道専の几帳面な性格や決して裕福とはいえなかった当時の暮らしぶりといった、辛島家の「生の声」を伝える資料といえる。

▲義助の恩返し

11 玉山先生詩集

宝曆四年（一七五四）



辛島家と関わりの深い秋山玉山には、学校創設・詩集出版・富士登山の終生の「三願」があった。そのうち、学校創設は、藩校・時習館の設立をもって成就し、詩集出版は、玉山に養育された第七代・義助が四百五十首余りの漢詩を六巻に編集・出版したことにより願いが叶った。「辛黒光輔」は、幼名・黒之允、諱・光輔を表記しており、本資料は自分を育ててくれた玉山に対する、義助の恩返し作品といえる。

第八代才蔵

略歴

安永五年（一七七六） 時習館句読師に任命（辞退）
天明三年（一七八三） 時習館訓導助役に任命
同六年（一七八六） 時習館訓導に任命
享和二年（一八〇二） 昌平坂学問所に招聘
文化元年（一八〇四） 時習館助教に任命
文政四年（一八二一） 時習館教授に任命
同八年（一八二五） 病氣により辞任
天保元年（一八三〇） 時習館教授に再任命
同十年（一八三九） 病氣により辞任、死去

父子同僚

第七代・義助の嫡男として生まれた才蔵は、十一歳で時習館に入り、明和五年（一七六八）に時習館の句読齋から講堂に進学しています。安永五年（一七七六）には句読師に任命されますが、このときは「音義未熟」として、辞退しています。

その後も勤学を怠らず、天明六年（一七八六）には、訓導助役から訓導に昇任していますが、このとき父・義助もいまだ健在で、訓導として三十年余りその職にありました。

この「父子同僚」の例は極めて少なく、藩内で大いに称賛されたといえます。

才の才蔵

才蔵は、第四代・道珠と同じ「塩井」と号し、時習館教員として藩士の教育に長く携わり、数多くの著作を残しています。

才蔵が時習館の助教を勤めていた当時、「文文卿、詩紫溟、才蔵、馬鹿馬成」と市中で噂されたと伝えられています。

「文卿」は大城多十郎（壺梁・助教）、「紫溟」は高本慶蔵（紫溟・教授）、「馬成」は有馬源内（白嶼・訓導）のことで、当時の時習館関係者の名前をもじっています。

そのほかにも「才蔵、今儒臣ナリ、甚才名アリト云」（岡野逢原「逢原記聞」）、「才蔵才、不負其名」（頼春水「師友志」）といったように、才蔵の人物評はその名前に関連付けて語られることが多かったようです。

辛島先生はお元気ですか

藩主の参勤交代に従って才蔵もたびたび江戸に赴き、滞在中には江戸や諸藩の知識人と交流を深めています。

享和二年（一八〇二）には、幕府の招聘を受け、昌平坂学問所で経学を講じていますが、藩士の立場で招かれたのは、広島県の頼春水（頼山陽の父）、薩摩の赤崎海門ら、数人しかいませんでした。

他藩の人は、熊本藩士に会うと、「辛島先生恙無きや否や」と必ず質問していたといえます。

▲ 行政の参考書

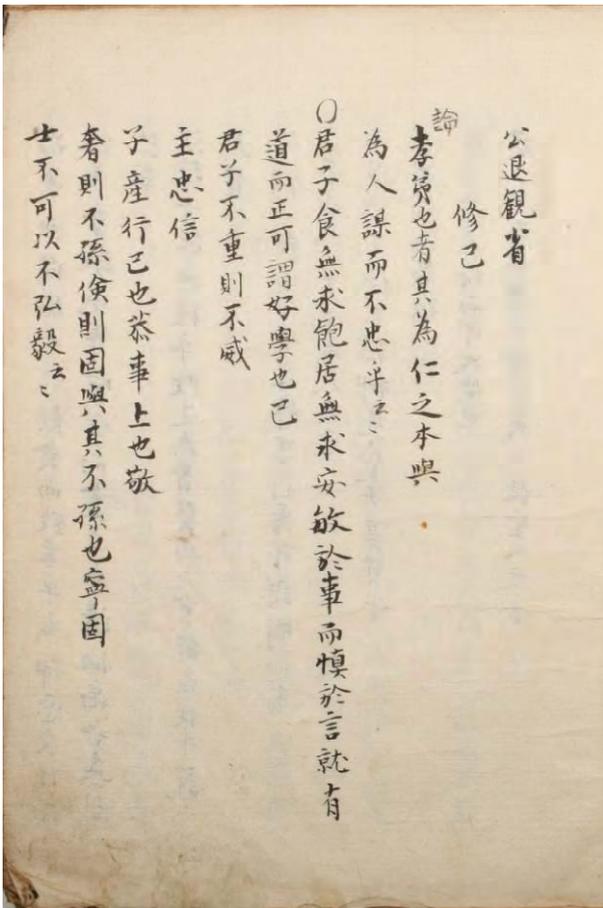
12 公退観省

文化十年（一八一三）

熊本藩家老・米田監物（是睦）の命を受け、行政の参考となる格言三百六句を「論語」「孟子」などの儒学書から選出した、第八代・才蔵の主著のひとつ。

修己、治人、選挙、刑法、田賦、国用、学校、祭礼、市政の各項目に分類し、本資料には引用元を示す「論」（論語）などの書き込みがみられる。

なお、本資料には、同様に藩主・細川忠利などの逸話から編集した「公退観省外録」という附録がある。



▲ 才蔵の教育論

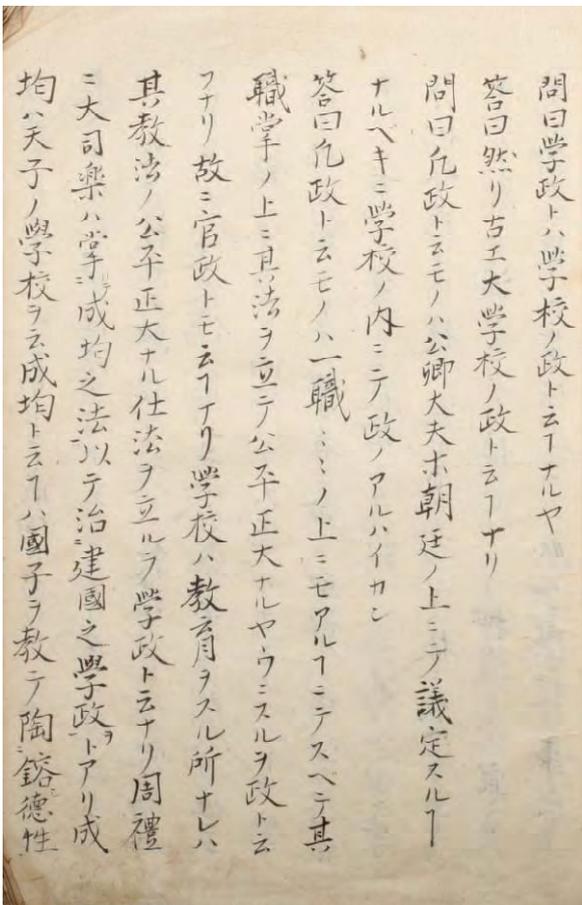
13 学政或問

文化十三年（一八一六）

才蔵が朱子学の考えを基本に、「学政」（教育行政）を論じたもので、「公退観省」と並び、才蔵の主著に挙げられる。

問答形式で、学校の在り方や教育方針などの諸問題を取り上げ、個人の長所や適性に合わせた人材育成方法などを論じており、その教育論は現代にも通じるところが多い。

なお、「公退観省」と同じく、本資料にも居寮生などについて論じた「学政或問附録」が残されている。



▲熊本藩士の業績評価

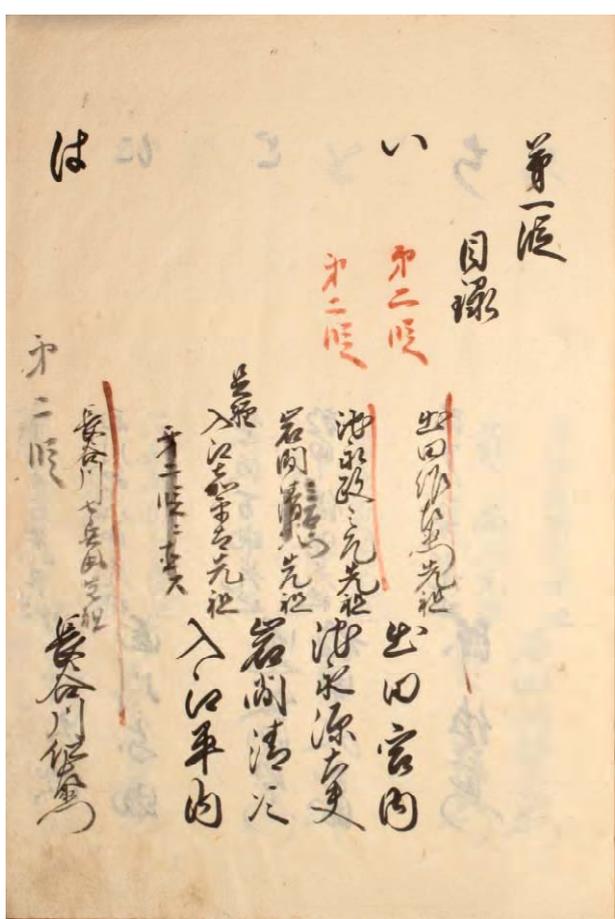
14 藩臣閥閥録草稿

文政五年（一八二二）

第八代・才蔵が藩命により「御家中武功之家筋」を調査し、「三段位」に「段分け」するために検証・作成した記録で、上中下の三冊から成る。

「閥閥」（功績）の名のとおり、関ヶ原の戦いや天草・島原一揆における武功や、戦死・殉死など、藩士の先祖の功績がまとめられている。

当初の予定どおり「第二段」「第三段」と朱書で書き込みがあるが、「政府再議アリテ段分けニハ不及」となり、結局は段分けの表記をなくし、書き直したものを藩に提出している。



▲辛島塾の規則

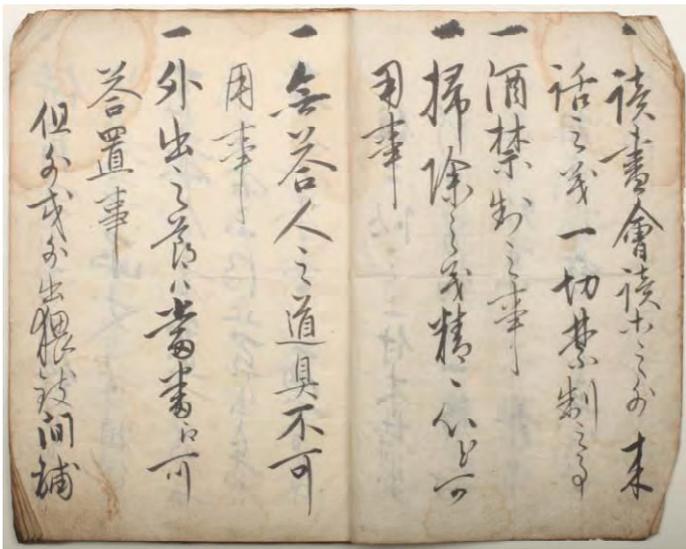
15 会約

江戸時代後期

家塾は、藩校とならぶ藩士の教育施設であり、辛島家も才蔵のときに開いていた。

本資料は、その塾の規則をまとめたものであり、他塾の規則にもみられる私語や飲酒の禁止のほか、整理整頓や掃除の徹底など、現代の校則にも通じる部分が多い。

後半部分には、約一六〇人の塾生の名前が記録されており、他藩からの入門者も多くみられる。



第九代 大七 第十代 多喜次

略歴

文政 六年（一八一三） 大七、才蔵の養子となる
 天保十二年（一八四二） 多喜次、時習館句読師に任命
 安政 二年（一八五五） 多喜次、時習館訓導に任命

秀でて実らず

第八代・才蔵には、学問・詩文に優れ、将来を大いに期待されていた嫡男・啓太がいましたが、文化元年（一八〇四）に二十一歳の若さで病死してしまいます。

時習館教授・高本紫溟は、啓太の墓誌に「秀而不実」（とても優れた才能を持っていたのに発揮できなかった）と「論語」の言葉を引用し、その死を惜しみました。

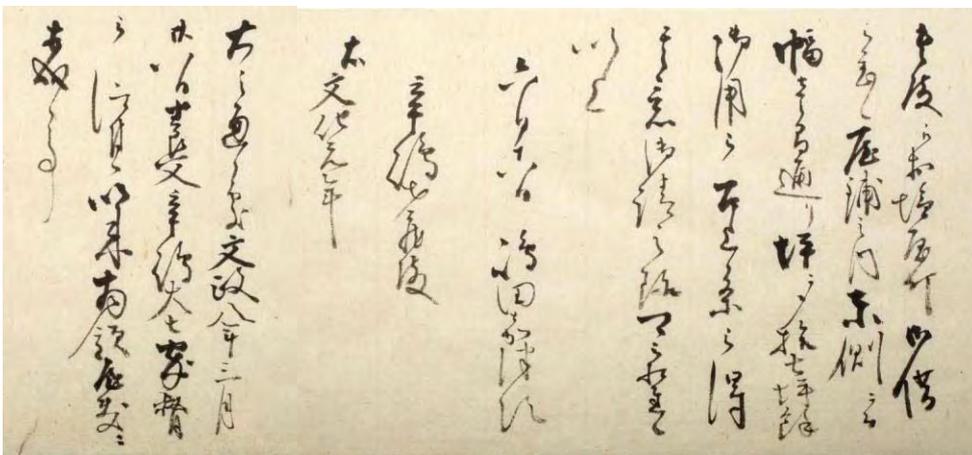
このとき啓太には妻子がなく、その死により辛島家は相続者が不在となる事態を迎えました。

啓太の死から二年後、才蔵に多喜次が誕生していますが、年少のため、同じ熊本藩士の岩越氏から大七が養子に迎えられ、辛島家を相続しています。

成長した多喜次は、蘭軒と号し、病気を患った大七に代わって家を継ぎ、時習館句読師・訓導を務めています。

△辛島家の自宅の変遷

16 覚書（写）



（部分）

辛島家の自宅の変遷を記録した本資料によると、辛島家は熊本城下塩屋町の町屋に居住していた。

寛政元年（一七八九）、第七代・義助のときに手狭となった町屋に代わって、中根平兵衛旧宅の借用が認められ、転居している。

この「堀端屋敷」は、第九代・大七の家督相続時に正式に藩から与えられた拝領屋敷となり、明治時代まで子孫が居住している。

屋敷の位置については、こぼれ話②・③を参照していただきたい。

明治時代